

恩納村の防衛隊

恩納村で最も多く防衛隊として召集されたのは第32軍野戦兵器廠（以下、兵器廠）という部隊です。防衛隊とは防衛召集という手続きで日本軍の部隊に配置された人の通称で、正式な部隊の名称ではありません。この兵器廠の任務は弾薬の保管・補給・修理でした。1945年3月6日、兵器廠には、沖縄全体で800人余りが入隊したとされます。資料によると恩納村からは10代から50代までの143人が兵器廠に召集されました。

【南風原に駐屯した兵器廠】

津波古蔵正さん（当時17歳・太田）たち防衛召集された人たちは恩納国民学校に集められ、行先を告げられることなく、南風原に到着しました。伊波得全さん（当時16歳・恩納）によると、南風原の民家に5、6人単位で入れられました。他の地域からもたくさん集められ、朝鮮人も5、6人いたようです。伊波さんや津波古さんたちの作業は食糧や武器を保管するための壕を掘ることでした。津波古さんによると防衛隊員に与えられたのは「鉄砲は2人で1丁、弾は5発」、手榴弾はなくダイナマイトに似せた竹筒だけでした。

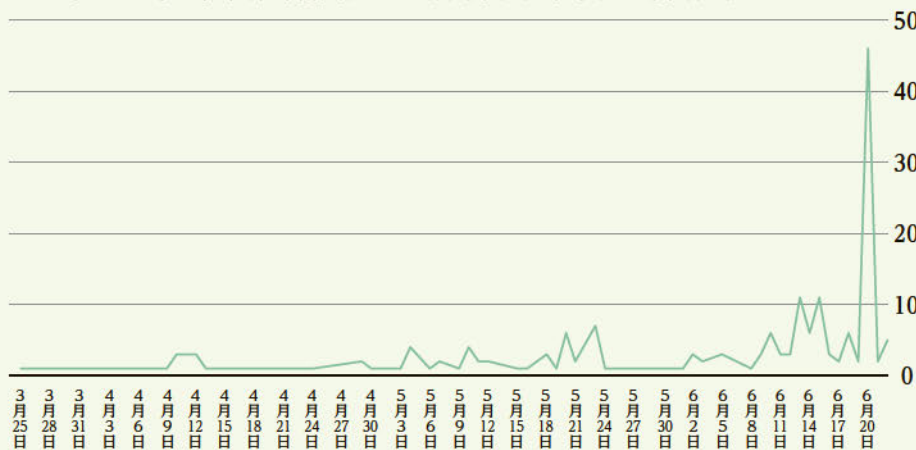
【南部撤退の中、さらに戦死者が増大】

戦後作成された兵器廠の史実資料（行動記録）には、首里の32軍司令部が撤退を決定した後、部隊がどのような状況になっていたかがわかる記述が残されています。

「寡兵（少ない兵）で白兵戦（接近戦）を演じ（中略）多数の戦死者を出し戦闘力は約50%に減じ」（1945年5月26日）

「兵力の大半を失い戦闘力は激減」（5月27～31日）

第32軍野戦兵器廠 恩納村出身戦死者推移グラフ



「連日敵の迫撃砲を受け兵員の損耗甚だしく、残存兵力百数十名となる」（6月5～12日）
「猛撃する米軍に対し全員突入し多大損害を敵に与えるも（中略）玉砕」（6月13日）
「（米軍が）戦車攻撃を開始（中略）、全員戦闘配備に就き敵（米軍）と激戦を交え夜（中略）、生存者全員斬込に出発す」（6月19日）※現代仮名遣いに直しました。

一日でも戦闘を引き延ばそうとする持久作戦の中、圧倒的な米軍の軍事力に押され、戦死者が増大している様子がうかがえます。

各部隊に所属する将兵の氏名や生年月日、本籍などが記載されている留守名簿という資料があります。それによると、兵器廠の戦死者数は6月に急激に増大していきます（グラフ参照）。兵器廠の残存兵が米軍に対して、最後に攻撃を行った6月19日の翌日（20日）の戦死者が最も多いことがわかります。

【「大城森」で戦死した村民】

平和の礎の検索システムでは、いつ、どこで亡くなったかも知ることができます。村民の南部戦線で戦死した方